

17. 中学校武道教材「柔道」について －中学校保健体育科教員の意識調査から－

神戸親和女子大学 齋藤 正俊
夙川学院高等学校 松本純一郎
摂南大学 横山 喬之
大阪心理技術研究会 船越 正康

17. On Budo('Martial Arts')as Teaching Materials for Junior High School Students －On the Basis of the Attitude Survey of JHS Teachers of Health and Physical Education－

Masatoshi Saito (Kobe Shinwa Women's University)
Jun-ichiro Matsumoto (Shukugawa Gakuin High School)
Takayuki Yokoyama (Setsunan University)
Masayasu Funakoshi (Osaka Society for Study of Psycho-Diagnostic Method)

Abstract

This paper is a report on attitude survey that we made of many teachers in charge of Budo ('Martial Arts') in Hyogo Prefecture immediately before the required subject was introduced into the junior high school system as prescribed by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology.

The survey consists of the 42 questions concerning the skill and safety instruction in judo and its understanding as budo materials, and the 5 questions concerning the various kinds of status on the part of the teachers concerned. Based on the answers to the questions above on the part of the 154 teachers of health and physical education from 69 junior high schools, we give the following results in terms of factor analysis of the attitude structure and its levels relevant to classes in judo as budo materials:

1. In terms of the Promax oblique solution based on the main factor method has converged on the following 9 factors:

confidence in instruction, respect for manners, worry about injuries, recognition of budo, ideas for instruction, emphasis on basics, enlightenment of budo, safety measures, and accident administration.

2. The following are the 4 points identified out of the 17 differences in attitude level in terms of the t-certification implemented between the 2 groups within the 5 questions:

- 1) Those teachers who are rank holders in judo and have had experiences in judo for men favorably accepted instruction in judo as a required subject.
- 2) Those teachers with no judo experiences, women teachers, non-rank-holders, and those teachers whose specialized area is a sport different from judo could not have confidence in their instruction and were at a loss for ideas for instruction.
- 3) Behind the attitudes of the subjects in 2) above were worry about injuries and anxiety about accident administration, and hence less positiveness for budo culture including respect for manners above all and less willingness forward enlightenment of budo.
- 4) Those teachers not confident in instruction were not in charge of budo, while those in charge of it took equally seriously both emphasis on basics and safety measures.

We conclude that safety measures and experiences in instruction exclusively devoted to the property of being budo must be taken seriously in judo classes as a required subject, and that those in charge are expected to face students in such budo classes with enough confidence.

I. はじめに

平成20年3月、新中学校学習指導要領が告示された。その中の体育領域では、平成24年度から中学1・2年生のすべての生徒に武道を履修^{1) 2) 3)}させることになった。現在、武道に対する中学校体育教員のとらえ方はどのようなものであろう。武道、特に「柔道」についてはニュースでも取り上げられているように、中学校体育の授業を考えた場合、危険性が高く必修化としての武道にはふさわしくないとする意見を聞く。そのため全日本柔道連盟は指導者養成講座を開催しながら、平成21年度から武道必修化に向けて研究部会を発足させ、今後の柔道指導における指導強化研究を進めている。

今まで女子は武道とダンスからの選択であったため圧倒的にダンスを選択しており、女子に武道を必修化しようとする教員は少なかったはずである。学校によっては男女共修⁴⁾男女別修の両方が考えられるが、それにしても武道は男子中心のカリキュラムであっただけに、今後は女子への初心者指導に関するカリキュラム研究⁵⁾も必要であろうし、指導法の研究も同様である。したがって女子の柔道の授業は女性教員が担当するのが望ましいと思われるが、本当に授業を担当するのか、女性教員の武道・柔道への意識はどのようなものであるのか、男性教員は女子の柔道の授業を担当するのか、現場における授業への取り組み⁶⁾を考えたとき、様々な問いに思いをめぐらせてしまう。このようなことを踏まえ、正課体育で柔道の授業を担当する教員、また、担当しないにしても現場の教員がどのような点に指導上の課題⁷⁾を抱えているのかを把握する必要がある。

本研究は、新たに新学習指導要領で武道が必修になったことを受けて、教材としての武道「柔道」について中学校保健体育科教員への意識調査^{8) 9)}を行い、今後の授業を考える基礎資料を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 意識調査質問票の作成

中学校保健体育教員の意見も加味し技術指導関連、武道関連、安全指導関連の3観点から45設問の質問票^{8) 10) 11) 12)}を作成する。表題を“武道教材「柔道」の授業について”として、フェイスシート部分に性別・柔道の授業担当・柔道経験・段位・実技専門種目予定の5質問項目を加える。

2. 調査

- 1) 対象：兵庫県下の中学校、合計69校の保健体育科教員男女
- 2) 方法：学校単位の郵送法と直接回答法
- 3) 期間：平成24年3月～6月、柔道単元開始前に実施

3. 統計処理

SPSS統計処理ソフトを用い、主因子法からプロマックス斜交回転¹³⁾を施して因子分析^{9) 10) 14)}を行い、因子解の決定と解釈・命名を行う。その後、比較群間別平均因子スコアからフェイスシートの5項目についてt-検定¹⁵⁾を行い2群間の意識差⁸⁾を確認する。差の特定は有意水準5%以下を取り上げる。

Ⅲ. 結果と考察

1) 調査票の回収結果

兵庫県下の中学校115校のうち郵送では55校、直接回収では14校の合計69校（回収率60.0%）であった。調査対象者内訳は男性教員114名、女性教員38名、不明2名の合計154名。フェイスシート5項目の内訳人数は表1-1の通りである。

2) 意識構造：因子の解釈と命名

因子負荷を求める際、5件法¹⁶⁾内の回答に偏りが生じたため、正規分布が成立しない設問5. 武道では礼儀を守ることを大切に、22.武道ではともに学ぶものとして相手を尊重させたい、45.受身は転倒したときに役立つことを理解させたい、の3設問を外して42設問を採用した。その後で意識構造の特定には主因子解からバリマックス回転を施した処、因子の独立性が保持されなかったために斜交解を採用することとした。プロマックス回転後に採用した9因子解のパターン行列は表1-2に示した通りである。表の第1因子におけるQ10とQ25の因子負荷は1.0を越えていた。しかし、構造行列までは理論値内に納まっていたので、経験的妥当性からみて9因子解を取り上げた。2設問の計算値は+.02で再現される。因子の解釈命名は、因子間で最大の因子負荷量を示す設問を軸に行ったが、該当設問の少ない場合は高負荷を示す他因子の設問⁹⁾をも参照して経験的妥当性を確認した。表1-2に9因子解別因子負荷量と表1-3に9因子の独立性を示す因子間相関係数を示した。第1と第4・5因子、第2と第5因子を中心に、因子間相関が認められるものの、各因子の独立性は保たれていた。本文に於ける文頭の数字は設問番号、文末の数字は因子負荷量である。

第1・指導確信因子：12設問が該当した。どの設問にも負荷は高いが、とくに10指導できる投技は十分身につけている.996、25授業で教える柔道について知識と経験は十分持っている.991、8生徒が安心して受身をとれる投げ方ができる.950、1指導できる投技は多い方である.901、の4設問に高かった。これらの設問内容は教員の技量に関連しており、生徒の信頼を得て安全に授業を進める自信を持っている。教員自身が柔道に関する知識を身につけ技を施すことができる。

表 1-1 調査対象者内訳及び各項目毎の人数内訳

Tabl 1-1. The inventory of subjects and the details of the numbers of subjects under each items

A 性差	度数、人 (%)	D 取得段位	度数、人 (%)
1 男	114 (74.0)	1 有段者 (男 60、女 6、不明 1)	67 (56.5)
2 女	38 (24.7)	2 段外 (男 54、女 32、不明 1)	87 (43.5)
3 不明	2 (1.3)	合計	154 (100)
合計	154 (100)		

B 柔道の授業担当	度数、人 (%)	E 専門種目	度数、人 (%)
1 する、男 95、女 19	114 (74.0)	1 柔道 (男 14、女 4)	18 (11.7)
2 しない、男 13、女 14	27 (18.8)	2 その他 (男 100、女 34)	134 (87.0)
3 未定、男 6、女 5	11 (7.1)	3 不明	2 (1.3)
合計 (性別不明 2)	152 (100)	合計	154 (100)

C 柔道経験	度数、人 (%)
1 あり (男 105、女 23、不明 2)	130 (84.4)
2 なし (男 9、女 15)	24 (15.6)
合計	154 (100)

故に、指導に確固とした自信が窺える「指導確信」因子と命名した。

第 2・礼法尊重因子：6 設問が該当し、26 正座の時に正しい姿勢と呼吸法を身につけさせたい .780、7 柔道で座礼と立礼をキチンと指導したい .712、33 武道では相手への尊敬の心を礼法によって身につけることができる .569、の 3 設問に負荷が高かった。武道経験者には礼節を大切にす意識が強い。新学習指導要領にも伝統的文化の理解を深めると謳われており、生徒に礼法を身につけさせたいと考える教員が多かったことの反映であろう。故に「礼法尊重」と命名した。

第 3・傷害不安因子：6 設問。6 後ろに倒す技を教えるのは怖い .709、29 柔道の授業は注意していても怪我をすることが多いので心配である .633、21 柔道は他のスポーツ教材よりも指導が難しい .527、の 3 設問に負荷が高かった。教員は他のスポーツ指導より怪我への不安を強く抱き、併せて柔道の指導に難しさを感じていた。

第 4・武道肯定因子：4 設問。30 日本人としての望ましい自己形成を武道が最もよく進めることができる .662、および 38 伝統文化としての武道のすばらしさは短時間で教えることができる .550、の 2 設問が中心にあり、伝統的武道文化がもつ精神性は成長過程における自己形成に有効と認識していた。さらに 11 一斉指導で受身を反復すると上達が早い .596、に加えて 34 攻防の面白さは寝技の申し合わせ乱取で十分に体験させられる .295、に負荷が高く、柔道固有の運動を武道の良さ¹⁷⁾と理解していた。

第 5・指導工夫因子：4 設問。37 練習では相手がかけやすい姿勢をとらせてからはじめさせる .658、31 初心者ではほとんどの投技で引き手を離さないように指導するのがよい .608、40 柔道では指導者にとって教えやすい技と難しい技がある .602、39 武道では勝負において冷静さを保つ大切さを指導したい .386、の順に負荷が高い。初心者の指導では具体的にどのような点に注意すればよいか、安全に授業を進めるにはどのような決まり事を守らせればよいか、どの技から指導するか、生徒が武道を体験する上での心の持ち方をどのように指導するか等、指導場面での工夫を中心に指導者の授業に取り組む姿勢を表す因子である。

表1-2 9因子解意識構造

Table1-2. The attitude structure in terms of the 9 factors

Factor name	Number and contents of questions	Factor								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
F1	10. 指導できる投技は十分身につけている。	0.996	0.023	0.108	-0.056	-0.063	-0.045	-0.071	-0.090	-0.059
	25. 授業で教える柔道について、知識と経験は十分持っている。	0.991	0.001	0.033	-0.038	-0.140	0.062	-0.023	0.058	-0.046
	8. 生徒が安心して受身をとれる投げ方ができる。	0.950	-0.030	0.046	0.066	-0.104	0.014	0.016	-0.014	-0.008
	1. 指導できる投技は多い方である。	0.901	0.059	-0.002	-0.161	0.000	-0.068	0.123	-0.017	-0.093
	20. 「形」にある抑込技は全種類教えることができる。	0.870	0.028	0.147	-0.105	-0.019	0.086	-0.155	0.058	-0.021
	13. 授業で教える柔道指導には自信がある。	0.866	-0.084	-0.127	-0.060	0.057	0.016	0.092	0.096	0.122
	43. 授業で教える範囲の技なら、自分は乱取でも使える。	0.855	-0.029	0.066	0.030	0.075	-0.171	-0.041	-0.170	-0.054
	4. 投技に魅力を感じる教え方ができる。	0.819	-0.002	-0.060	-0.084	-0.011	-0.041	0.204	0.069	0.134
	42. 専門家の指導を受けたので教えることに不安はない。	0.783	-0.120	-0.046	0.142	0.059	-0.139	0.036	-0.073	-0.014
	27. 抑込技によって、勝負の面白さを安全に教えることができる。	0.755	-0.053	0.082	0.109	-0.042	0.095	-0.043	0.053	0.155
	19. 安心して受身ができる指導を身につけている。	0.707	0.093	-0.133	0.106	0.054	0.038	-0.073	0.094	0.024
	15. 投げられても怖くない受身の指導ができる。	0.670	0.029	-0.135	0.135	0.047	0.066	-0.072	0.162	0.058
	26. 正座の時に正しい姿勢と呼吸法を身につけさせたい。	0.028	0.780	0.126	0.045	-0.209	0.013	0.040	0.115	0.070
	7. 柔道で座礼と立礼をキチンと指導したい。	-0.032	0.712	-0.113	-0.199	-0.077	-0.031	-0.063	-0.033	-0.052
	33. 武道では相手への尊敬の心を、礼法によって身につけることができる。	-0.155	0.569	-0.089	0.426	-0.133	0.087	0.036	0.128	-0.097
16. 柔道に必要な補強運動を十分にとり入れたい。	-0.060	0.428	0.064	-0.028	0.125	-0.023	-0.033	0.021	0.216	
2. 武道では真剣に打ち込むことを教えたい。	0.064	0.408	-0.188	-0.016	0.171	-0.142	-0.052	-0.028	0.043	
14. 武道における礼の心はスポーツ教材でも育つ。	0.071	0.368	-0.129	0.073	0.054	0.051	-0.170	0.030	-0.339	
6. 後ろに倒す技を教えるのは怖い。	-0.026	0.017	0.709	-0.129	0.056	-0.090	-0.061	0.513	-0.032	
29. 柔道の授業は注意していても怪我をすることが多いので心配である。	-0.028	0.170	0.633	-0.163	0.209	-0.009	0.008	0.022	0.134	
21. 柔道は他のスポーツ教材よりも指導が難しい。	-0.166	-0.072	0.527	0.042	-0.065	-0.028	0.182	0.070	-0.142	
3. 柔道では男女併修の指導はやりにくい。	-0.002	0.013	0.444	0.048	-0.232	0.060	-0.052	0.075	0.082	
9. 柔道よりも痛い思いをする授業はあまりない。	0.144	-0.132	0.365	0.011	0.085	-0.063	0.016	0.023	0.009	
18. 初心者の授業では、大外刈を除くべきである。	-0.016	-0.098	0.344	0.038	0.028	-0.149	0.028	0.207	-0.143	
30. 日本人としての望ましい自己形成を、武道が最もよく進めることができる。	0.102	0.138	0.190	0.662	-0.178	-0.212	0.155	-0.170	0.109	
11. 一斉指導で受身を反復すると上達が早い。	0.016	-0.160	-0.081	0.596	-0.104	0.185	0.113	-0.008	0.097	
38. 伝統文化としての武道のすばらしさは、短時間で教えることができる。	-0.051	-0.049	-0.129	0.550	0.136	-0.224	0.037	0.093	-0.029	
34. 攻防の面白さは、寝技の申し合わせ乱取で十分に体験させられる。	0.106	-0.078	0.270	0.295	0.293	0.058	-0.243	-0.240	-0.109	
37. 練習では、相手がかけやすい姿勢をとらせてからはじめさせる。	-0.029	-0.201	0.001	0.027	0.658	-0.002	0.079	-0.035	0.044	
31. 初心者では、ほとんどの投技で引き手を離さないように指導するのがよい。	0.044	-0.047	-0.104	-0.074	0.608	0.247	0.079	0.009	0.003	
40. 柔道では、指導者にとって教えやすい技と難しい技がある。	-0.155	0.125	0.125	-0.173	0.602	-0.012	0.101	-0.138	0.027	
39. 武道では、勝負において冷静さを保つ大切さを指導したい。	0.064	0.209	-0.020	0.151	0.386	-0.109	0.321	0.179	0.047	
23. 準備運動の一環として、受身は毎時間行うことが大切だ。	0.085	0.022	-0.045	-0.029	0.147	0.735	0.076	0.089	-0.106	
17. 中学生にも絞技や関節技の指導を考えてもよい。	0.143	0.058	0.098	0.060	0.038	-0.547	0.059	-0.112	0.041	
12. 投技の始めは、約束練習を多くしたい。	0.042	-0.091	0.065	0.156	0.222	0.325	-0.143	0.194	0.080	
28. 受身の指導を十分させないと、あとの投技は進まない。	-0.133	0.056	0.219	0.092	0.079	0.291	0.020	-0.151	0.211	
36. 勝者がガッツポーズをすることは、敗者への思いやりを欠くので禁じたい。	0.001	-0.050	0.038	0.125	0.154	-0.049	0.628	0.010	0.016	
44. 武道の授業は、スポーツよりも集中力が要求される。	-0.037	-0.025	-0.008	0.457	0.054	0.135	0.468	-0.012	-0.112	
35. 左利きの生徒にも、はじめは全員に右受身と右技を指導する方がよい。	0.173	0.163	0.181	-0.027	-0.039	0.237	0.081	0.522	0.040	
41. 衛生上柔道衣は個人毎に購入し、使用するのが望ましい。	0.239	0.187	-0.035	-0.097	0.146	0.124	0.146	-0.440	-0.174	
24. 生徒が怪我をしたときの処置体制は準備できている。	0.149	0.075	0.068	0.088	0.063	-0.053	-0.015	0.160	0.595	
32. 柔道では、はじめからゲーム（試合）を行うことができないので指導が難しい。	-0.002	-0.166	0.219	-0.029	-0.065	0.103	0.226	0.122	-0.351	

F1：Confidence in instruction. F2：礼法尊重因子；Respect for manners. F3：傷害不安因子；Worry about injuries.

F4：武道肯定因子；Recognition of budo. F5：指導工夫因子；Ideas for instruction.

F6：基本重視因子；Emphasis on basics. F7：武道啓発因子；Enlightenment of budo.

F8：安全対策因子；Safety measures. F9：事故管理因子；Accident administration

表1-3 因子相関行列

Table1-3. A factor correlative matrix

Factor	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	1.000	.286	-.263	.432	.447	.160	-.087	-.102	.290
2	.286	1.000	.111	.372	.484	.190	.050	-.169	.213
3	-.263	.111	1.000	.010	.097	.191	.261	-.259	-.163
4	.432	.372	.010	1.000	.388	.116	-.093	.004	.068
5	.447	.484	.097	.388	1.000	.268	.017	-.002	.121
6	.160	.190	.191	.116	.268	1.000	-.161	-.387	.137
7	-.087	.050	.261	-.093	.017	-.161	1.000	-.115	-.127
8	-.102	-.169	-.259	.004	-.002	-.387	-.115	1.000	-.152
9	.290	.213	-.163	.068	.121	.137	-.127	-.152	1.000

第6・基本重視因子：4設問。23準備運動の一環として受身は毎時間行うことが大切だ.735、17中学生にも絞技や関節技の指導を考えてもよい-.547、12投技の始めは約束練習を多くしたい.325、28受身の指導を十分させないとあとの投技は進まない.291、に見るとおり、柔道の授業における基本的な約束事や柔道の基本である受身の重要性¹⁸⁾を自覚していた。

第7・武道啓発因子：2設問。36勝者がガッツポーズをすることは敗者への思いやりを欠くので禁じたい.628、44武道の授業はスポーツよりも集中力が要求される.468、の2設問が該当した。他に39武道では勝負において冷静さを保つ大切さを指導したい.321、にも負荷が高く、武道を学ぶ際の心の持ち方、集中力の必要性を強調する等、武道の理解・啓発を深める因子である。

第8・安全対策因子：2設問。35左利きの生徒にもはじめは全員に右受身と右技を指導する方がよい.522、41衛生上柔道衣は個人毎に購入し使用するのが望ましい-.440、の2設問であったが、6後ろに倒す技を教えるのは怖い.513、にも負荷が高く、衛生管理よりも一斉指導の重要性と安全対策に重点をおく意識とみてよい。

第9・事故管理因子：2設問。24生徒が怪我をしたときの処置体制は準備できている.595、32柔道でははじめからゲーム(試合)を行うことができないので指導が難しい-.351、が該当した。武術から出発した柔道には危険が付いて回る。万が一怪我が生じた場合には、爾後措置の体制が整えられていなければならない。授業の導入段階における事故管理に主眼をおく因子である。32は負値をとっているが、寝技から入れば安全にゲームの楽しさを満喫できることを知る意識であろう。他に14武道における礼の心はスポーツ教材でも育つ-.339にも負値が認められた。これは危機対応を前提として武道の特性を認め、安全管理の面から自覚する意識とみてよい。

このように9因子解の解釈、命名を見てくると柔道の必修化直前における中学校保健体育教師の意識方向は、基本を重視しつつ指導に工夫を凝らす中で安全対策と事故管理に腐心する一方、武道を肯定的に捉えて礼法を尊重しつつ武道の啓発を試みる。その過程で傷害不安を一掃する指導法に対する確信を得ようとしていたのではなかろうか。

3) 意識水準：因子スコアの変動

意識差は9因子中7因子、17件に認められた。図1は縦軸の原点(0)を154名の全平均として標準得点化したものである。図の正負両次元は各因子名の肯定と否定を表し、縦列に因子名・横列にフェイスシート部分A~E項目を配して比較2群別平均因子スコアを示した。項目別結果は次の通りである。

A 性差：女子教員は授業中の怪我や事故管理に不安を抱き、指導上の工夫を進めて確信を持って指導に当たる段階に達していない。

B 柔道の授業担当：指導に確信の持てない教員は担当しない。

C 柔道経験：性別意識と同様に柔道経験のない教員に障害不安が強く、事故管理や指導の工夫に消極的かつ確たる自信を持ってない。

D 取得段位：有段者と比べて段外者は指導の工夫や確信に向かわず、武道を肯定して礼法を尊重する意識が低い。

E 専門種目：柔道を専門種目とする教員は指導の確信と工夫および武道の肯定と啓発に最も高い意識水準を示すのに対して、他種目の教員は逆であった。

これらからA~Eの意識差を図の縦列・因子名を中心に見直すと、柔道必修化に向かう保健体育教員の意識4傾向が浮かび上がる。

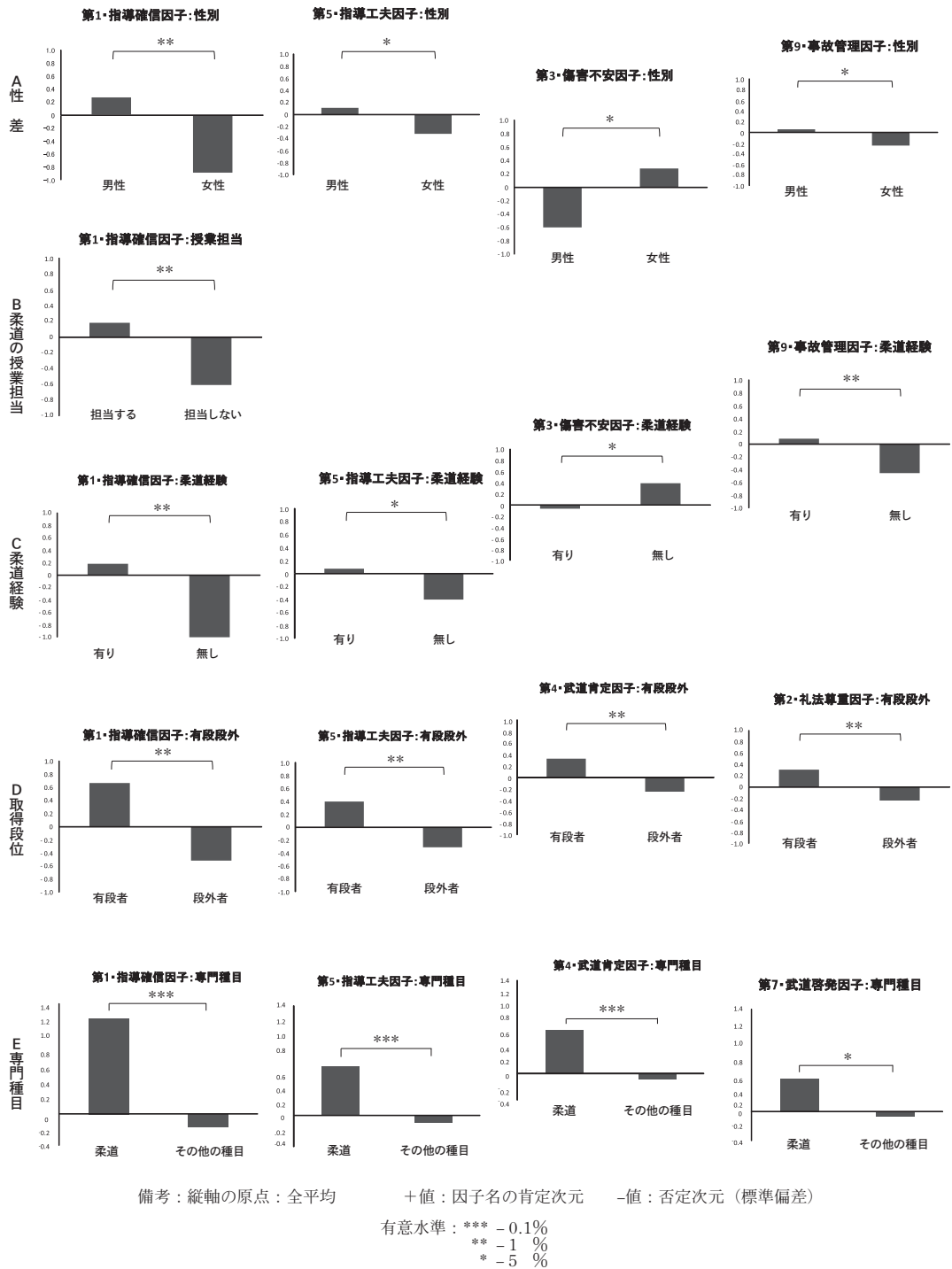


図1 A～E 5項目×9因子解別意識水準比較：標準因子得点

Figure1. Comparison of the attitude standardized in terms of the 9 factors in the domains of the 5 items A-E

1. 第1・指導確信因子は5項目の全てに、第5指導工夫因子は4項目に意識差が認められた。すなわち必修化柔道の授業に対する教員の関心は専ら指導に焦点づけられ、女性教員を中心に柔道経験のない段外者、柔道を専門種目としない教員が指導の工夫に消極的で自信がなかった。確信の持てない教員は担当から外れていた。
2. 第3・傷害不安と第9・事故管理因子では同じ2項目に差が認められ、女性や柔道経験のない教員が授業での怪我やその措置に不安を覚えていた。
3. 第4・武道肯定因子では2項目、第2・礼法尊重と第7・武道啓発因子では1項目が該当した。礼法の尊重に始まり武道を肯定し啓発する姿勢は有段者と共に柔道専門の教員が堅持するのに対して、他種目や段を持たない教員は否定的であった。
4. 第6・基本重視と第8・安全対策因子に意識差が検出された項目はなかった。この2点は誰もが等しく重視する授業遂行上の視点と考えられる。

以上のように、調査票作成時に掲げた柔道の技術指導と安全指導及び武道教材としての理解に関する42設問は9因子解に収斂したが、その意識構造と意識水準は担当教員の抱く課題を反映して妥当な結果を示したといえよう。すなわち、柔道専門の教員を筆頭に柔道経験のある男性や有段者が正課体育柔道の授業を肯定的に受け止めるのに対して、他種目の教員、柔道経験のない女性教員、段外者は授業の実施に自信と工夫が不足していた。その理由として傷害不安と事故管理への危惧があり、礼法尊重を始めとする武道文化の肯定と啓発の意識に達していないことを指摘することができよう。これらのことから、専門家による中学校保健体育科教員対象の柔道研修や講習会の機会を増やし、施技と指導体験に裏付けられた経験を通して指導安全性と武道性に関する理解を深める取り組みが必要であることが示唆されよう。

IV. 要約

中学校における武道必修化授業が開始される直前に県下の担当教員に対して独自に作成した質問紙による調査を行った。調査票は柔道の技術指導と安全指導及び武道教材としての理解に関する42設問と対象特徴5項目で構成され、69校154名の保健体育教員の回答を下に、因子分析法によって武道教材“柔道”の授業に関する意識構造と意識水準を明らかにした。結果は次の通りである。

1. 主因子解からプロマックス斜交解を用いて、指導確信、礼法尊重、傷害不安、武道肯定、指導工夫、基本重視、武道啓発、安全対策、事故管理の9因子解が得られた。
2. 対象特徴5項目内2群間のt-検定による意識水準差17件から次の4点が得られた。
 - 1) 柔道専門の教員を筆頭に有段者・男性・柔道経験のある教員は、必修化柔道の指導を肯定的に受け止めていた。
 - 2) 柔道経験のない教員や女性・段外者・他種目専門の教員は、指導に自信が持てず工夫に戸惑いがあった。
 - 3) その背景には傷害不安と事故管理への危惧があり、礼法尊重を始めとする武道文化の肯定と啓発に向かう意識が希薄であった。
 - 4) 指導に確信のもてない教員は授業担当から外れ、担当教員は基本の尊重と安全対策を等しく重視していた。

必修化柔道の授業では、安全性と武道性に特化した指導体験を重視し、担当者が自信を持って臨めるようにしたいものである。

V. 参考文献

- 1) 高橋健夫ほか：体育科教育学入門，大修館書店，39-46，2002.
- 2) 中学校学習指導要領解説保健体育編，3(5)：8-11，99-117，文部科学省，2008.
- 3) 中村民雄：中学校武道必修化について－我が国固有の伝統と文化をどう伝えるか－武道学研究，42(3)：1-9，2009.
- 4) 松本純一郎ほか：柔道に関する意識の因子分析的研究－中学生男女共修授業における意識変容－，講道館柔道科学研究会紀要13，193-201，2011.
- 5) 高橋健夫ほか：体育科教育学入門，大修館書店，171-178，2010.
- 6) 佐々木武人ほか：現代柔道論－国際化時代の柔道を考える－，大修館書店，54-59，1993.
- 7) 竹内善徳編著：柔道の視点－21世紀へ向けて－，道和書院，東京，66-77，78-85，86-95，2000.
- 8) 齋藤正俊ほか：正課体育「柔道」の楽しさに関する授業前意識調査－高等学校男子生徒の意識分析から－，大阪武道学研究，13(1)：1-10，2004.
- 9) 船越正康ほか：指導にともなう柔道に関する意識変容の研究－高校生の正課体育について－，大阪武道学研究，8(1)：1-11，1998.
- 10) 田中敏：実戦心理データ解析，7刷，新曜社，213-255，2002.
- 11) 船越正康：武道の特性と指導上の問題点について－現代武道観研究の立場から－，武道学研究，12(1)：111，1980.
- 12) 船越正康ほか：柔道に関する勝利達成条件研究－質問票の作成と基礎分析－，柔道科学研究2，1994.
- 13) 小塩真司：SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで，東京図書，42-55，106-142，2005.
- 14) 海保博之：心理・教育データの解析法10講，第11刷，福村出版，150-168，1996.
- 15) 岩原信九郎：教育と心理のための推計学，日本文化科学社，180-184，1991.
- 16) 河野和憲ほか：柔道に関する意識分析－因子分析法適用研究の再構成－，大阪武道学研究，11(1)：15-28，2002.
- 17) 尾形敬史：小学校における体育授業への柔道導入の実践的研究，講道館柔道科学研究会紀要12，147-160，2009.
- 18) 齋藤正俊ほか：柔道に関する高等学校男子生徒の意識分析－正課体育「柔道」について－，講道館柔道科学研究会紀要10，159-169，2005.